

俳優の石坂浩二さんが、BSジャパンの新番組「石坂浩二のニッポン凄い人名鑑」の収録において、バブル経済が崩壊して間もない1994年から始まった「開運！何でも鑑定団」は、「だまされた人を笑う番組でもあった」と一連の流れを振り返った。テレビ東京随一のヒットとなった同番組が始まった頃の社会の雰囲気や、「バブルがはじけた時の虚しい感じ。だまされた人の数多くのどうしようもない感じ」と表現し、「そこからやはりお金というものについて、もう一度考えるというか。お金は考える時に簡単な入り口だなというのが『鑑定団』が当たったところだと思う」と分析。

本物の美術品・骨董品と信じて家宝を持ち込んだ出演者が、贋作であったり、無価値な物と知らされたりして打ちひしがれる姿が番組の見どころの一つで、「バブルがはじけるような時期に始まってないと、だまされた人が山のように出なかった。だまされた人を笑う番組でもあったんですよ。今はそんなだまされる人が出てきませんよ」と時代の変化をしみじみと語る。新番組ではゲストが持ち込む“お宝”の金銭的な価値ではなく、その物にまつわる思い出にフォーカスを当てるようで、「今度は心の動きだと思うんです。どういう人たちと触れ合うことで、その心の動きが生まれてきたかを探っていければいいなと。」

実は聖書ではカネや“お宝”の話が山ほど出て来るが、要は「カネは大事だが一番ではない。」ということだ。イエスは

**「天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。素晴らしい値うち真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。」**

**マタイの福音書13章45-46節、**

と言っている。お宝を探すこと自体は何も問題ないが、最も価値のあるものとは、天の国である永遠の命であり、それをもたらすキリストの愛である福音、そしてそれに触れた我々一人ひとりによる他者への愛である。したがって「持ち物を全部売り払う」という但し書がついている。つまりイエスを心から信じ、心の目が開かれ、真に価値あるものに焦点を合わす努力が肝要だ。「オレはあいつより多く持っている」などというのが一番アカン。もし己が持っていると思うなら神に感謝し、人を助けるべきであり、神は、そういう心の動きや人との触れ合いを最も評価する。目先の利益にだまされない、神による霊の眼力と審美眼をいただこう。

2017-9-25

